

行動についての一試論(一)

園 直 樹

Working Papers in the Hyhohthesis of Behavior (1)

NAOKI SONO

I. 序 人格の定義

人格とは二つの相反するものが矛盾的分裂的統一的に共存すると考え、一人格「ヤマダ タロウ」について例証する。

「ヤマダ」は苗字にして、家族及び教育社会の一員、即ち社会性をもつ集合数的存在、Blachの言う如く「ヤマダ」は文化という公約数を分有する分数である。

「タロウ」は名前にして、「タロウ」を強調する「ヤマダタロウ」は、この世に一人しかいない特殊な個人的な存在で、ヤマダ氏を集合数、割り切れる数とすれば、タロウは割り切れない自由な数字、単位無理数である。

かくて、「ヤマダ タロウ」を $\sqrt{8}$ とすれば、有理数 2 、無理数 $\sqrt{2}$ 、即ち $2\sqrt{2}$ という人格を表す。この発想はヘーゲル論理学の数の概念、パーソンズの行動の社会理論、西京大学助教授近松良之氏の行動の個人理論に求め、就中近松氏の単位 C を $\sqrt{2}$ と考えた。

人格に入れたのは、ドストエフスキーの小説「二重人格」による。

II. 行動規準への疑問

行動の規準の設定について。既述人格の定義における「ヤマダ」とヤマダ、田中、松井、その他大勢、計社会人全部との間における討議会に於て採決された行動様式即ち「ヤマダ」に示される有理数分数と、社会人全部に示される有理数公約数とが相対的に一致する場合、ヤマダ氏の行動はよい行動である。そして当然、ヤマダ氏と社会人全部は有理数故一致する。がしかし、両者が一致しない場合は、ヤマダよりもタロウの方を主張する時である。

さて、Marxは行動規準となる文化(その規範的側面を強調して文化規範一法、道徳、慣習一)の方にも $\sqrt{2}$ があるのではないかと、言う。これが社会体制の変化に於て把握される行動理論で、完全な民主主義の社会にな

れば法律の中に $\sqrt{2}$ はなくなると理解される。

この反対の説としてManheimをあげる事が出来る。民主主義社会になればなる程、共同社会から逸脱する者がふえる。判り易く言えば、日本人8千万の有権者としての社会人の民意を反映する8千万人と心理的に同数の社会人としての政治家が生まれるという民主主義社会が実現すれば、I-object(私と物との)関係に於て私は石や犬と同じ様になり、I-thouの関係で私は平均化され、I-myselfで「私」は私自身にだけ興味を感じ共同社会から離れる。

以上「私」が行動規準の設定として最初に言った事、即ち(1)法律に $\sqrt{2}$ がない見解、(2)Marxのいう法に $\sqrt{2}$ あり、但し民主主義社会には $\sqrt{2}$ がないという事、(3)民主主義社会になれば個人の $\sqrt{2}$ が一層著しく示される事、は各々矛盾する。「私」は矛盾を感じつつ学校で社会保障や社会福祉を講義している。

Mr. Yamadaは講義に於て当然論理的、即ち割り切れる有理数に自らを規定し拘束し調和づける。ノートは法律の文章の様に唯一の解釈をのみ学生に与える。そして社会保障は、友情・職業・結婚というDas Sozialeな共同社会を充実するという理想を設定し、人間の心は善だと意識しそれに対してマルクスやビバリッチなどの方法論を採用する。そして社会科学の目的は、行動の理解及び説明なので行動を伝統的行動、目的合理的行動、価値合理的行動に分類し、そのすべてを統一づける目的合理的行動、即ち経済的行動として社会保障を把えている。それを意識してからノートを書く。

しかし、ノートを書き乍らMr. Yamadaはタロウを意識する。タロウは、Mr. Yamadaに言う。法律には $\sqrt{2}$ がある。即ちマリノフスキーの自由の概念「一切の拘束の完全な欠除」、自由の形態「法律からの自由、即ち無政府」即ち不調和がある。タロウはYamadaにこれを指摘する。故にYamadaは、「駄れノタロウノ」と

ヒステリックにわめく。しかし、わめくのは「私」自身の社会保障の敗北である。

今暫くタロウの言分に耳を傾ける。以下はタロウの言葉である。行動には、ウェーバーのいう感動的行動がある。これは道徳的判断に規準をもつ限り好ましからざる行動である。しかし、この行動の理解及び説明はマートンの言う様に「表に現れた事のみを判断する道徳や法律的判断では扱えられない」。感動的行動は単に犯罪や芸術の行動に止まらない。パーソンズの言う様に経済的行動に於ける非経済的側面の抽象は大切である。しかるに Mr. Yamada は社会保障に於てすべて行動を社会的に意味づけ価値づける目的論に従う。マルクスや神に従う。他方、彼は「児童相談室」の職員として、フイチンガーの言う様にフロイド理論を、意識に従属する無意識として無意識を合目的的に把える。そして他方、「社会学」の実習でマートンの言う様に Mr. Yamada 氏と彼の親切な心は、彼が観察した本当の事実をでっち上げる。即ち自分の尺度又は社会人の意識からの尺度で事実を構成し満足する。Mr. Yamada はかくて、神、マルクス、フロイド、コントを頑固に固執する。又、君のいう自由の概念は、保守と社会主義という同じ共同社会での問題で、自由にはマリノフスキーのいう共同社会から離れる概念もある。そしてタマスのいう一切の行動は、適応努力の諸形態と解すれば犯罪などは価値をもった共同社会とは違った社会での適応ではないか。デユルケイムは、犯罪者には犯罪者集団に一つの社会規範をもつという。科学者は、ルンペン、放蕩者、冒険家、と同様で新しい経験へのデーモンなあこがれを持つ、とタスタは言っている。人間の心には天国から地球までの階段がある。とモンテニユは言っている。

君はビバリッジを読み、貧困の対策は社会保障、病気は公衆衛生、無知は教育、不潔は住宅政策、と割り切った。そしてビバリッジが怠惰の問題は一番むずかしいと言うのを読み、怠惰対策＝完全雇傭と考えるのは単純だと注を加え、それに赤線を引っぱった。もし君がそんな赤線はないというなら、君は近い将来タロウという底抜けな不良を理論的にやつつけられないので、マルサスの言う様に、「貧民撲殺」を、太陽族に対する P. T. A. の奥さん連の様にヒステリックに非難したら、反対に英雄視したり、或いは目下製作中の映画監督の様に、「馬鹿は死ななきやなおらない。」と太陽族を突っぱなすだろう。しかし、それを言ったなら君は、「社会福祉」をやる資格はない。君の対象はその様な馬鹿な、ヤクザな人々ではないか、社会性を持たず、社会性の網の目から落ちて行く人々ではないか。対象に社会性がないのに、彼

らを引っかける網が道徳、法律、経済学、フロイド等、全て日常生活に於て目的をもった理論の網である限り、そこから抜けて出る人もいる。そいつらを引っ掛けられないからといって、法律や道徳で非難するのは、倫理や巡査にまかしておこう。

君の「社会福祉」、「社会保障」は理想主義、Humanism を認め、それに向って勇敢な兵隊として進撃する。文化人 Mr. Yamada は満足しない。タロウは理想主義的でなく、現実的であり、社会人でなく個人なのだ。そして君とタロウは、「ヤマダ タロウ」という一人の人間の中に共に暮す運命を持っている。喧嘩して別れたら精神病院に入るか豚箱に入らねばならない。人生は長いのだから、仲良くしよう。

その為にタロウは、自分の不良な事を君に話した。君もその様に聖人振らずに社会保障の間口を拡げて欲しい。お互いにタロウとヤマダの間の溝をうずめて行こう。一人の人間に於ける個人と社会人という溝、そして世界における何の公の肩書もない庶民と、肩書をもつ学者の溝、そして一人の人間におおいかぶさる個人性と社会性の24時間の形容のつかない泥沼での格闘——その象徴として可哀そうにヤマダタロウは、「心理学」を月曜日に「社会保障」を水曜日に講義するために、頭の切り替えをせねばならぬ、一この不幸な人間のために、溝のうめたてをしよう。(以上がタロウの主張)

そのために、とマンハイムは言う。8千万国民に平均にある選挙権の行使によって作られた8千万国民の政府、議会によって作られた美しい憲法25条、そこで作られた生活保護法の現実、その様な形式的な民主主義に対するマンハイムの皮肉をすぐにフアツショを予想して抹殺するか。それとも彼を抹殺しないか。そして個人の赤裸々な気持ちをまず認め、お互いに話合つて自主的な労働組合を作ったら、会社で健康保険の組合を作り組合管掌の保険を発展させたら、都市や農村という自治体に於て国民健康保険を作るか、その様な法律に賛成するかしないか。そして又、行動の善いか悪いかを単に国会のビール腹の諸君が多数決で認めた法律、そしてその施行者及び賛成者、同感者によってのみ判断されるべきか、又はされるべきでないか。

マンハイムは、この疑問を投げ、未完成の仕事として1947年死んだ。マートンは彼の理論と1947年に死んだタマスの行動の理論などを受けつぎ、一方パーソンズはタマスとマリノフスキー等を受けついだ。そして彼らは、行動の理論を考えている。西京大学の作田助教授は「こ

これらの本は抽象的なものでもし具体的な基礎となる単位又は尺度として、近松理論（前述）がよい」と言った。筆者はこの近松理論という行動に対する個人の単位、C、を $\sqrt{2}$ と考え、それを社会に対しても $\sqrt{2}$ がある事を要て求するという険を試みた。以下はその報告である。

■. 行動の単位 $\sqrt{2}$ について

単位Cを、 $\sqrt{2}$ と置きかえたのは、1949年、後でいう不良青年が自らの命を断つ事により、彼の数量刑法学なる理論を貫いた事、及びマンハイムの8千万国民とその民衆を代表する政治家によって構成される民主主義というヒントを同じ長さをもつ二つの線、（即ち1と1、又は8千万と8千万）そして直角二等辺三角形の斜辺を社会保障や法律や刑法などと考えた場合、斜辺はピタゴラスの定理により（ $\sqrt{2}$ ）又は（8千万 $\sqrt{2}$ ）というどちらにせよ $\sqrt{2}$ を含むという事。即ちここで、法律に $\sqrt{2}$ があるのに、個々人の行動に文句を言う資格がないではないかという疑問を投げためである。

しからば、法律に $\sqrt{2}$ があるのに係らず依然として今後も相変わらず個人の行動に文句を言う事が予想されるとすれば、その理由として何があるのか、と言え、行動の善し悪しは如何に個々の雑多な人間が（「僕の」「私の」「オレの」行動は正しい）と信じ、且つ如何に絶叫しても何にもならない。行動の善し悪しは、行動者が決めるのではない。それは次の様な事柄が決めるのである。

(1)行動者が如何なる階級に属するか。その側としてアントワーズ、ベルテという実在の人物を小説にした『赤と黒』の最初の章の後、J. ソレルの法廷での発言、「私の罪。それは私を裁く人々が私と同じ階級に属さないという事実によって……。」

この言葉を解釈すると、同一階級とは、その人々の間で割り切れる数字をもった人々の集団と言える。J. ソレルは彼らにとって割り切れぬ階級、即ち $\sqrt{2}$ という階級に属する。

(2)家庭、学校、職場など Primary or small group 及び南洋の一つの島などの未開社会に於ける group について、Merton や Persons の見解。

In-group, 即ち Community の成員の善き行動、and aut-group, 即ち Community 成員からの追放者の悪い行動、そしてここに云う and は端的に云うと

become といっている。即ち、In-group は In-group の中で割り切れる人々をのみ受け入れ、out-group は In-group で割り切れぬ $\sqrt{2}$ を吸収する。

(3)1949年、東大学生光金融会社クラブ社長、山崎氏は自己の借金300万円を払わぬ場合それを犯罪と考えた。即ち300万円犯罪。そしてその前提として (a)合意は拘束さるべし、(経済学の原則) (b)拘束の解除は事情変更の原理のみである。(c)合意という契約は人間と人間とにのみ拘束され、死体という人間の事情を変更した物件には適用されない。といった。

この理論は、理論として筋が通っていると心理学者宮城音弥氏は言う。しかしすべてを割り切ろうという極端な合理主義は、割り切れぬ不合理なものを自分の気質として持っている事を示す。山崎氏は分裂気質であったと宮城氏は言っている。ここに於て彼の気質は $\sqrt{2}$ となる。

かくて、(1)(2)(3)の例証より、階級から気質までの一つの道程を押し進め、ブルドーザーで地ならして溝をうめたて途中の抵抗をおし切ってそれを飛行機の滑走路と想定する場合、その共通の単位 $\sqrt{2}$ を得た。

かつて大学を出た頃の Talcott Parsons のテーマは、経済的行動における非経済的側面の抽出であった。そしてそれ以来、彼は一貫して心理学や社会体制論を学び、その共通となる行動の単位を求めている。

筆者は想う。 $\sqrt{2}$ は意味と目的のない分裂的な自由な単位である。しかし個人がこの自由を心に持つ時に、すべての行動の一つの出発が生れ他方社会自身もこの自由を内に内在するのではないか。

人格という小さな存在、他方、文化、社会という giant 又一つの人格の中の個人と社会。そこに共通した一側面を抽象する行動の単位 $\sqrt{2}$ の門に到達した筆者の貧しい作業過程を示す報告を終る。

(小稿の一部は日本社会福祉学会第四会本年10月、於京都で発表された)

(1956年10月受理)